

出版社ではたらくバイセンが案内する

一冊の本ができるまで



一冊の本ができるまでの工程は、本のジャンルによって異なります。今回は、著者が文章を書く「書籍」の作り方をご紹介します。出版社勤務の編集者「バイセン」が案内役を務めるガイドツアーのスタートです！

つくりたい本を考える

まずは、どんな本をつくりたいかを考えます。本をつくる編集者は、ふだんからアンテナを張って、つくりたい本や多くの人が興味を持つテーマの“種”を探します。誰に対して、どんなことを伝えたいのか、アイデアを具体的にまとめて企画会議で提案します。



企画会議をする

会議には編集長や編集部員、さらには本を売る営業担当者が同席することもあり、編集者の提案を検討します。本のタイトル、内容、対象となる読者層などを明記した企画書とは別に、SNSで話題になった、テレビで取り上げられたなど、「この本は売れる」という説得力も必要になります。



原稿を書く

書籍は、一人の編集者が一冊を担当します。著者の筆が進まないとき、編集者は一緒に考えたり資料を用意したりして励まし、著者が書き上げるまで全力でサポート。そのため、編集者はマラソンの伴走者にたとえられています。



Feature



タイトル・見出しを付ける

タイトル・見出しとは、内容がわかるように文章の前に示す短い言葉のことです。長い文章を区切る役割も果たします。内容がひと目でわかり、かつ興味を引くような言葉である必要があるため、編集者のセンスが問われるところです。

著者に原稿を依頼する

企画会議でOKが出たら、テーマに合った著者に原稿を依頼します。毎月出る雑誌とは違い、締切は数カ月から1年などさまざま。編集者が書いてほしい内容と著者が書きたい内容をすりあわせて、企画を練り上げていきます。



原稿をチェックする

原稿が出来上がると、編集者は“最初の読者”として目を通します。企画の意図に合っているか、わかりにくいところはないか、じっくり読みこんで、不備がある場合は著者に書き直しを依頼します。この作業は完成までに繰り返し行われることもあります。

